

シリーズ3 2型糖尿病と闘う④ 合併症への対応

新

ひょうごの

医療

糖尿病の怖さは、それによって引き起こされる病気に、すなわち合併症にある。「三大合併症」の一つに数えられる糖尿病網膜症は、日本人の失明原因の第2位とされ、患者は十分な注意が必要だ。

血糖値の高い状態が続くと、全身の血管は少しずつ損傷を受ける。特に、目の奥にあり、光を感じる網膜には、非常に細い血管が張り巡らされており、影響が大きい。糖尿病によって網膜の血管が傷み、目に異常が生じる病気、それが糖尿病網膜症だ。

糖尿病患者の2〜3割が発症しているとき、糖尿病歴が15年以上になれば、血糖はコントロールできていても割合が高まるという。進行すれば視力低下や失明を招き、2014年の調査では視覚障害の原因の15・6%を占める。相当に進行するまで自覚症状はないことが多い。ツカサ

網膜症に対する光凝固術

手術機器進歩し成績向上

牛病院（姫路市網干区和久）の眼科部長で、糖尿病網膜症領域の責任者を務める大原在元さん（45）は「症状が現れれば、すでに重篤な状態であることが多い。糖尿病と診断された場合、網膜症に至っていないとしても、年に1回は眼科クリニックで眼底を調べる検査を受けるべきだ」と強調する。

■レーザー治療

糖尿病網膜症は三つの段階に分かれ、初期から順に「単純網膜症」「増殖前網膜症」「増殖網膜症」という。

細い網膜の血管にこぶができて、わずかな出血が起こる単純網膜症の段階では、糖尿病の治療で血糖をコントロールしながら経過観察する。直接的な治療を始めるのは、増殖前網膜症からだ。

この段階では、網膜の細い血管が詰まり、栄養不足や酸欠が起こっている。治療は、レーザー光線で酸欠を起こした網膜を焼く「光凝固術」が用いられる。

治療の最大の目的は、新生血管の発生を抑えること。酸欠状態が続くと、酸素を補給しようとして新しい血管が生じる。しかしこの血管は極めてもろい。血管が破れ、目の内部の硝子体に出血が起こると、大幅な視力の低下を招く。また、出血によって網膜に増殖組織という膜ができて、失明につながる網膜剥離を引

き起こすこともある。

レーザー治療について「網膜を元に戻すのではなく、酸素の消費量を減らして視力を守る。ある意味で破壊的な治療」と大原さん。酸欠が広範囲に及ぶ場合は、視力に重要な「黄斑」と呼ばれる部分を除き、網膜のほぼすべてを焼き固めることになり、3、4回の治療が必要となる。

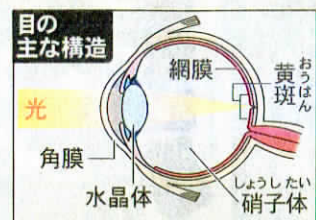
そのため視野が狭くなることもあるが、約8割で進行を抑えられるという。治療中、比較的強い痛みを感じる人もいますが、進行を抑える唯一の治療だと理解してほしい。

■鍵握る継続診療

だが、すでに進行が著しい場合、レーザー治療の成功率は5〜6割に落ちる。そのときは「硝子体手術」が必要となる。針のような器具を目に入れ、出血や増殖組織を取り

血管発生抑え視力守る

	網膜の状態	自覚症状
単純網膜症	網膜の細い血管にこぶ(血管瘤)ができたり、小さな出血が起こる	ほとんどなし
増殖前網膜症	網膜の血管が詰まり、網膜に栄養不足や酸欠が生じる	視界のかすみ(ないこともある)
増殖網膜症	新生血管が発生。硝子体での出血や網膜剥離を起こすことも	視力低下や視野に影(失明の危険)



眼球の構造を示しながら糖尿病網膜症を説明する大原在元・眼科部長＝ツカサ牛病院

糖尿病の三大合併症 糖尿病によって引き起こされる病気で、糖尿病網膜症のほか、糖尿病腎症、糖尿病神経障害が挙げられる。腎症は、腎機能が低下し、透析治療が必要となることがある。神経障害は、手足などにしびれや感覚の鈍化が起こり、脚の切断を招くこともある。最近では、がんや認知症の発症との関連も注目されている。

除いたり、網膜剥離が起こしていれば元に戻したりする。高い技術を要するが、手術機器の進歩で成績は向上。かつて糖尿病網膜症は最大の失明原因だったが、2位に下がったのは、手術の進歩が大きいとされている」と大原さんは話す。

それでも、糖尿病に特有の緑内障を併発するなどし、失明に至るケースもある。また病気の進行程度にかかわらず、黄斑にむくみ(浮腫)が生じて視力が低下し、日常生活に支障が出る場合もある。

「やはり血糖のコントロールが重要」と大原さん。加えて「単純網膜症や増殖前網膜症の段階から診療を受けていれば、失明に至ることはほぼない」と話す。(武藤邦生)